新岡垣風土記 第456回

岡垣のため池②

岡垣歴史文化研究会　石田　健次

明治時代の初めに編纂された『福岡県地理全誌』によると、当時、岡垣の15の村には98カ所のため池があった。その内、57カ所のため池は江戸時代に造られていることが分かる。築造年が判明しているもので最も古いため池は、寛永18（1641）年に造られた鍋田ため池である。それから約20年後の寛文2（1662）年には、同時に4カ所のため池が造られている。以後、農業用水確保のために多くのため池が造成された。

明治期の各村のため池

明治前期の15の村々のため池の数と灌漑面積は表のとおりである。

ため池が一番多く造られているのは、原村である。13カ所のため池が造られているが、小規模のものが多い。これは原村が位置する地形からくるもので、農業用水の確保には、ため池に依存する以外の方法がなかったからだと思われる。次に多いのは高倉村で、原村と同様に、農業用水の確保は主にため池に依存していることが分かる。

山田村の灌漑面積には、山の後ため池（現在の一丁ため池）の用水が黒山村にも供用されているので、その面積が含まれている。また、吉木村の灌漑面積についても、門田ため池の用水が三吉村と松原村にも供用されているため、同様にその面積が含まれている。

松原村にはため池が存在していないが、慶応4（1868）年に6858人の出夫を予定して、遠坂ため池の造成に着工したことが記録されている。しかし、このため池は、数年後には使われなくなっている。松原村においても、ため池造りが行われていたことになる。

江戸時代のため池造りの一例

ため池の造成を、村単独で普請することは困難である。このため、遠賀郡内の各村から動員された農民が歩役としての労役に従事して完成させている。規模の小さなため池であっても、数年の年月を要するものであり、農民にとっては大きな負担になったと思われる。

岡垣町史に、高倉村の大膳塚ため池と吉木村の狐塚ため池が造成された経緯が記されている。

この二つのため池は、嘉永6（1853）年に70日間におよぶ日照りで大干魃となったことから、灌漑用水の確保のために造成された。

大膳塚ため池は、元治元（1864）年から慶応3（1867）年にかけて、14の村々から4022・4人の出夫により完成している。狐塚ため池は、慶応元（1865）年に着手し、慶応3（1867）年に完成しているが、25の村々から7338・8人の出夫となっている。この2カ所のため池は、小規模なものであるが、完成までにはこれだけ多くの農民が動員されている。

大規模なため池の造成ではどれだけの農民が動員されたのであろうか。米作りにとって、ため池は必要なものであるが、農民にとっては大きな負担であった。

つづく

村名	ため池数	灌漑面積
糠塚村	8	15町6反
山田村	5	21町
黒山村	9	33町6反
波津村	3	1町1反6畝
原村	13	17町6畝
内浦村	9	20町8反7畝
手野村	7	37町1反8畝
三吉村	3	9町4反
吉木村	9	114町4畝
野間村	8	20町8畝
高倉村	11	23町3反3畝
上畑村	3	6町
海老津村	5	8町1畝
戸切村	5	15町5反
松原村	0	―

▲各村のため池数と灌漑面積